

第七回 平成二十四年十一月十七日

阪神間の劇場と演劇文化

平川 大作
瀬口 昌生



○平川大作

ご紹介にあずかりました平川と申します。演劇あるいは映画等の授業を担当しております。イギリスとアメリカを中心とした英語の海外戯曲を翻訳して上演する仕事を年に数本担当しております。今日は私と瀬口先生とで進めてまいります。瀬口昌生先生は今年四月から大手前大学に着任されました。これまで、そして現在も俳優として活躍なさっています。



○瀬口昌生

皆さん、こんにちは。今日は雨の中、ようこそお越しいただきました。ご紹介にあずかりました瀬口昌生と申します。

私は千葉県出身で、もともと芸能人になりたかったんです。芸能人になるならお芝居をしなければいけないということで、大阪芸術大学の舞台芸術学科に入りました。そこで四年間演劇を勉強して、その後、大学の師匠の縁もあり、尼崎市にあるピッコロシアターを本拠地とする「兵庫県立ピッコロ劇団」という劇

団に旗揚げメンバーとして入り、十二年間役者活動をしていました。その後、フリーランスになり、今、この大手前大学のメディア・芸術学部の講師をしております。

今日は、瀬口、平川と、あと学生諸氏で、学生がいなければ成り立たない授業の展開になっておりますので、お楽しみください。よろしくお願いいたします。

○平川大作 お手元に資料を配っております。今回は第四章「阪神間の劇場と演劇文化」と題して、今月と来月、お付き合いいただきます。今日はこの教室で学生諸君の手を借りて、阪神間、もう少し広くとって大阪も含まれますが、現役で稼働中のいろいろな劇場をのぞいていこうという企画です。それでは、早速三つの流れでお話を進めていきましよう。

一つ目は「蓄積の上の聖地」です。この公開講座は「アートと聖地」と冠して今まで第三章に至るまで様々な形の聖地、またアートとの関係をめぐって講演が進行してきたと思います。演劇の分野でどこに聖地があるかといえば、まず劇場です。その場所でも多くの俳優が演技をして、作品をつくってきた。その蓄積が劇場を特別な場所、まさに聖地にします。いつしかその舞台に立つことが、名誉になったり、喜びになったりする。あるいは、観客の立場では、そこに çıkかけて芝居を観るといふ経験が、まさに、この連続講座でいうところの「聖地」への接近と経験になります。

一言で言えば、劇場というのは、やはり特別な場所ですね。その特別な場所は歴史の中にうずもれているわけではなく、今、すぐそば、そこにありますよという視点にたち、これから聖地としての劇場をいくつか、ご紹介したいと

思います。

それでは、二人からいきます。川本真実さんと大野智雄君、報告のスタンバイをよろしく。

○瀬口昌生 スライドが映りますので、少し暗くさせていただきます。

○大野智雄 メディア・芸術学部三回生の大野智雄と申します。

○川本真実 総合文化学部三回生の川本真実です。

○大野智雄 私たちは「イオン化粧品シアターBRRAVA!」に行きました。イオン化粧品シアターBRRAVA!は、大阪市中央区城見にあり、JR大阪環状線の大阪城公園駅から徒歩五分のところにあります。ほかにも、地下鉄大阪ビジネスパーク駅一号出口と、京阪京橋駅でも行くことができます。一番わかりやすくていろいろな場所から行けるJR環状線を私たちはお勧めします。

シアターBRRAVA!は毎日放送が運営していて、一九九七年堂島に存在していたMBS劇場のかわりに、一九九九年、大阪MBS劇場として完成しました。二〇〇五年四月にはシアターBRRAVA!としてリニューアルオープンされ、二〇〇六年からは運営権をイオン化粧品が取得し、現在の名称となりました。

イオン化粧品シアターBRRAVA!は、舞台芸術全般がメインで、コンサート、講演会、発表会、イベントなど、さまざまな目的に使われています。客席は、一・二・三六席で、一階七四三席、二階三九三席、別途車いす席四席となっております。

ます。一階席、二階席、どの席から見やすく、舞台に近い構造で、ホール全体に一体感があります。

一階ロビーに無料のコインロッカーが設置されており、大きな荷物をお持ちの際はぜひ使ってみると思います。お化粧室は各階ロビーにあります。女性用化粧室は混雑解消のため一方通行となっています。多目的トイレは、ロビー一階にあります。他には、カフェコーナーがあり、一階ロビーで飲み物と軽食の販売がされていますが、劇場内は飲食禁止となっています。舞台が終わると物販が開始され、パンフレット、オリジナルTシャツ、オリジナルマグネット、トフレームなどが売られています。

私たちは、十月二十日にシアターBRAVA!に行きましたが、そのときの公演が鈴木貴之演出の『樹海』という作品でした。それぞれの事情を抱え、自殺の名所、樹海に迷い込んだ三人の男と、一人の女の物語です。彼らは樹海で、「私が死のうと思つたわけ」と題したプレゼン大会を始めます。みんなとかかわっていくうちに、四人は本当に死ぬ気はなかったのではないかと気づいてしまい、四人は一緒に樹海から抜け出して帰ろうとしますが、そのなかの一人である老人が、自分と一緒に帰れないと言ひ出します。彼は数カ月前に樹海に来て自殺した霊で、自殺してしまったことを悔やんで、樹海にずっと潜んでいたのです。事実を知つた男二人と女一人が老人を残し、樹海から抜け出します。最後に、一人になった老人が、もつと早く気づけばよかったと言つて舞台は終わりを迎えます。

中盤まではコメディ・タッチですが、ラストは何か考えさせられるような内容で、とても興味深いものでした。

この『樹海』の客層は大学生ぐらいから年配の方まで幅広い層の方がいました。公演中のお客さんの反応は、長く

て難しいせりふやおもしろいせりふがあると拍手が起るなど、反応がとてもよいと感じました。

これからの公演に、蛭川幸雄演出の『日の浦姫物語』や森山未來と満島ひかり主演の『一〇〇万回生きたねこ』などがあります。もし興味がありましたら、一度見にいつてみてください。以上で終わります。

(拍手)

○平川大作 はい、ありがとうございます。この中で、シアターBRAVAーにいらつしやった方、おられますか。お二人ですかね。チケット代は幾らくらいですか。

○川本真実 五千五百円です。

○平川大作 五千五百円だと、学生にとっては大きい金額ですね。この劇場だと、高いチケットは一万円ぐらいしますよね。

○瀬口昌生 一万二千円とかりますね。

○平川大作 お金を持っている世代がよく集まる。それを狙った営利主眼の商業的な演劇の聖地ですね。切り口としては企業が立ちあげて、運営している劇場の一例として、シアターBRAVAーをあげることができます。最近はこのように、劇場や公的施設と同じように、劇場自体に「イオン化粧品」と企業の名前を冠としてつけることもよくみられます。もともとはMBSというテレビ局主導でつくられた劇場で、東京から演目を持ってきて公演するということが多いですね。比較的、世間に名を知られているスターが出る演目为主体という感じ

ですね。

○瀬口昌生　そうですね。

○平川大作　関西の劇団でここを使うっていうことはありますか。

○瀬口昌生　ありますよ。あるにはありますけど、やはりタレントさんが一人、二人出ているような公演というのが多いでしょうね。つまり、商業演劇といわれるものですね。何かそういうスタイルの作品が多い劇場ですね、ここは。

○平川大作　がっちりお客さんを入れて儲けようということですね。

○瀬口昌生　はい。

○平川大作　演劇自体は経済的な視点では、そんなに儲かるものでもないんですが、それでも単位としては大きいお金が動くというところですよ。

次はNGKの発表です。劇場の種類を考えたときに、まず運営している母体が何なのかという観点があります。それから、規模が大きいか小さいかという、非常にわかりやすい基準もあります。ご紹介したシアターBRAVA!、あるいは、後で出てくる宝塚大劇場などは、劇場そのものが「大劇場」と名乗っている場合もあり、実際数百人以上の観客を収容できる大きな劇場です。

一方、小さめの劇場はそのまま「小劇場」という言い方をします。ここ二〇年以上ぐらいは「小劇場」といえば規模として小さめの劇場を指すのと同時に、そういうところで主に活動している若い演劇人たちを指す言葉になっていま

す。例えば、自分が俳優をしているときにそういう言い方しますね。

○瀬口昌生　そうですね。

○平川大作　「小劇場出身です」みたいなことを言うんですが、これは劇場というよりも、そういう流派といいますが、演劇のジャンルですね。

○瀬口昌生　あと、自主劇団と言ったりしますね。

○平川大作　それでは準備もできたので、続けて企業が母体で運営している大きな劇場の紹介をしてもらいたいです。思います。

○矢野留衣　みなさん初めまして、メディア芸術学部三回生の矢野留衣です。よろしくお願いします。今回、私は笑いの殿堂とも呼ばれる「ランド花月」に行ってきました。多分、皆さんも結構行かれていますことが多い、なじみの深い劇場かなと思うんですけど、私も今回でもう三、四回ぐらい行っています。

　　なんばランド花月のプロフィールを紹介します。なんばランド花月は一九四六年生まれの六十六歳、結構もうおじいちゃんです。昔は「なんば花月」という名前で、元の場所も難波は難波ですが、今のなんばランド花月とは異なる場所に建てられていて、一年ぐらいは「なんば花月」と「なんばランド花月」が併用されていました。

　　愛称は「NGK」です。皆さんも御存じの通り、なんばランド花月のイニシャルを取ってNGKとなっています。キャッ

チコपीトが「笑いの殿堂」ということで、若手からベテランまでたくさんの芸人に使われてきたお笑い芸人の聖地とされている由緒正しい劇場となっています。

こちらが劇場で行われている主な公演内容です。大体の公演が漫才から新喜劇という二部構成になっています。たまに夜公演として、芸人がメインの単独ライブも行われています。

今、この夜公演の時間、多く上演されているのが『吉本百年物語』。吉本が百周年記念で企画した演目です。今年四月からやっているんですけど、四月は、陣内智則さんと国仲涼子さんが主演でした。月ごとに公演を変えていて、今年十一月は、ロザンの菅さんと、新喜劇の未知やすえさんが笑福亭仁鶴さんの歴史を扱っています。あと半月ぐらいで終わりますが、もしよかつたら見にいらしてください。

駅から三、四分ぐらいで、あらためて距離が近いと感じました。NGKに着いたら仁鶴さん人形が飾られていて、中はお土産売り場や屋台などで結構にぎわっていました。本当に活気のある劇場です。

入り口に桂三枝さんと井上竜爺さんの人形がありました。こちらは劇場の中です。この日は平日にもかかわらず、人が多くて、一階席、二階席も合わせて八五八席あるんですが、超満員でした。客層的には、いろんな年代の方がいるなか、学生さんもいたので、団体で何かの行事で来ているのかなと思いました。

私が見た回の構成が大体こんな感じですよ。客席には撮影の人も入っていて、テレビでの放送もあるらしく、メンバーも豪華な方々が出ていらつしました。「大阪はやほりいい街だな」ということを改めて教えてくれる空間でした。

お客さんと舞台上に立っている芸人さんの距離が凄く近くて、会話ができるぐらいの勢いだったので、ほかの舞台では味わえない、お笑いライブならではのものだなと思いました。

皆さんもぜひ足を運んでみてください。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

○平川大作 テレビの収録が入っていたそうですが、放送時間ではCMを入れて四十分ぐらいじゃないかな。

○矢野留衣 そうですね。

○平川大作 実際の公演時間はどれぐらいですか。

○矢野留衣 実際もそれぐらいです。

○平川大作 そんなにカットはない感じですか。

○矢野留衣 そうですね、そんなにないですね。

○平川大作 いわゆる「客いじり」みたいなのはしていませんでしたか。

○矢野留衣 むしろ、お客さんが客席から「芸人いじり」みたいなことをしていました。(笑)

○平川大作 具体的にはどんな感じだった。

○矢野留衣 例えば、上方よしおさんと西川のりおさんの漫才で、西川のりおさんが普段やらないギャグをやつて、結構滑ったんですけど、お客さんが「もう一回、もう一回やつて」とか、そんな感じですよ。

○平川大作 あたたかい声が掛かるんですね。

○矢野留衣 はい、お客さんから何かそういう声がありました。

○平川大作 吉本の公演というところ、この前うかがった話がありますね。

○瀬口昌生 僕の大学の師匠が、秋浜悟史といまして、もう亡くなっているんですけども、大阪芸術大学に赴任された当時、ゼミ生を連れて課外学習に行くわけです。

当時のNGKだったと思うんですけど、客席に座った学生たちに課題が与えられる。何の課題かといったら、芸人に向かつて『やじを飛ばせ』と。で、実際学生がその通りにやったところ、あとで支配人が先生のもとに「やめてくれ」と言いきたらしく、同じ企画が二度できなかつたらしいという話を聞いたことがあります。

何かそういうところで度胸試しということもあるでしょうけども、芸人さんたちもそういうところで覇気を覚えたんじゃないかなというふうに想像はできますね。

○平川大作 吉本の劇場の特徴を申し上げると、要するに自社の所属のタレントたちを使って、自分たちが持っている劇場で興行しているという形式ですね。

先ほどのシアターBRAVA!というところは、MBSなり、あるいは冠でイオンとついても、基本的には「貸し館」という形をとります。つまり、劇場をレンタルするということですね。そうでない公演、つまり劇場が企画して芝居をつくる場合は、一般に「自主公演」という言い方をします。多くの劇場は自主公演と、それから貸し館の形で劇

場を三六五日回していくわけです。

その比率は劇場によって違います。吉本に関していえば、かなりの特例はあるかもしれないけど、基本的には自分たちの会社のものしかやりません。要するに、自分たちのものを自分たちのところで、劇場という形で販売しているという、そういう大劇場ですね。

○瀬口昌生 このあいだ、芸人の公開結婚式をやっていたらしいですね。

○平川大作 はい、私はたまたま劇場前で目にしたんですが、それも興業のうちという作りになっていました。お笑いの世界を目指す若者たちにとっては、喜劇というジャンルの最高峰とも言える一つの聖地といえるでしょうね。若い諸君があとここに立つことを夢見て頑張ってるわけで、もはや全国的と言っているいいでしょうね。

○瀬口昌生 ええ。

○平川大作 拠点が大阪で、一九四六年といえば戦後間もなくだったんですね。何かそういう力強さを感じさせるものがありますね。

○瀬口昌生 吉本はNGKの向かいにも劇場を持っていますよね。

○矢野留衣 5upよしもと。

○瀬口昌生 その四階にワッハ上方がありまして、僕は小劇場で立ったことがあるんです。客席が四百ぐらいで、ちよっどよかつたんですけど今はないですね。

吉本は意外と見切りが早いという印象があります。お初天神の入り口のところに、うめだ花月もありましたが、もうないですね。あと、J R京橋駅の横のところに京橋花月というのがあったんです。当時、実はコンセプトがあつて、そこに専属の劇団をつくるというんですね。一般から公募して、公のコンセプトではお芝居で御飯を食べさせるぞということをしたんです。しかし、結局長くは続かなかつたようですね。

○平川大作 それは今、全国的に展開されているようですね。吉本は沖繩から北海道まで劇場という小さな拠点をどんどんつくつていって、それでタレントを回している、それが非常に成功している。そのように劇場をチェーン店のよう
に展開していく経営で、全国に拠点を持ち得ているのは、他には劇団四季くらいですね。規模は違いますが、劇場を支店として展開していく発想は共通しています。吉本の場合、劇場経営から手を引くときは見切りも早いです、企業理念としてそうした方向なんです。

矢野さん、どうもありがとうございました。

○渡邊彩 皆さん、こんにちは。メディア、芸術学部三回生の渡邊です。NGKは関西の代表ですが、同じような関西代表といつて過言ではない大きい劇場、宝塚大劇場に行つてきました。皆さん、行かれたことはありますか。おそらく、たくさんの方が行かれていますと思いますが、私は今回、初めて行きました。

正式名称、宝塚大劇場は、兵庫県の宝塚市にある劇場で、宝塚歌劇団の本拠地であります。毎年百万人以上の観

客を動員しています。座席数は二二五〇席で、SS席、S席、A席、B席もある巨大な劇場になっています。SS席が一万千円で、S席が八千円、A席は五千五百円、B席は三千五百円です。私は、今回少し贅沢をしてA席にしました。

宝塚歌劇団以外にも、年に数回、音楽などのコンサートも開催されています。

A席では周りの人はみんな双眼鏡を持っていました。舞台から結構遠くになるので、顔の表情などが分かりにくいからです。その点では、SS席にしたかつたんですけれど、こちらは前売りの時点で完売していました。双眼鏡は五百円で貸し出しもしています。私はネットでチケットを購入しましたが、当日券もあります。しかしB席など少し後ろの方になると思います。

最寄り駅は阪急宝塚駅で、駅からは徒歩十分です。その他では、今津線でも行けます。阪急宝塚駅で降りてすぐ、案内が出ているので迷うことはありません。商店街というか、ショッピングモールの中を通っていつて、真つすぐ出ると「花の道」という筋が見えてきます。ここを真つすぐ行くと、すぐに劇場にたどり着きます。

現在の宝塚大劇場は、一九九三年一月一日に新装され、開場しました。施設も充実しており、自動販売機はもちろん、売店やレストランも中に入っています。宝塚大劇場の期間限定のフードメニューなどもありました。その他、外にはファストフードやごはん屋さんなどもありますので、観劇し終わってから夜ご飯などいいなと思えました。

また、小さい子供さんを預かってくれるチャイルドルームも設置されていますので、便利です。車いすでも大丈夫な

ように、スロープもありました。女性用トイレもたくさん設置されていたので、混んでいても回転がすごく速かったです。

今回、私が観劇したのは、『ロマンティック・ミュージカル』めぐり会いは再び』です。八年ぶりの三本立てということと、初日ということもあり、満席で大変賑わっていました。私は観劇する数時間前に着いていたんですけど、もうこの時点で既にキャストさんの入り待ちをしている人がたくさんいました。そして終わった後は出待ちもありました。

次回公演『ベルサイユのばら』は一月一日から始まりますので、観にいかうかなと思いました。十二月一日から前売り券が発売されるので、SS席を狙っています。(笑)ぜひ次は前の方で観たいです。

館内がとても綺麗だったのが印象的でした。私は、小さい劇団の公演によく行くんですけど、こういう大きいところは行ったことなかったもので、凄く綺麗でした。これぞ宝塚という感じがしました。関西の誇りだと思いました。双眼鏡を持っている人がほとんどだったので、まるでコンサートかと思いました。新人の公演もされていて、そちらは少し格安ですので、フレッシュな初々しいメンバーを見たい方は新人公演がお勧めだと思いました。

以上です。御清聴ありがとうございました。

(拍手)

○平川大作 渡邊さん、劇場ではお客さんの性別はどんな感じですか。

○渡邊彩 女性が七割から八割くらいです。年齢層は、平日だったのもありますが、結構高めでした。

○平川大作 七割、八割ということは、男性もいたということですか。

○渡邊彩 男性の方もおられました。一人で来ている人もいましたし、あと、奥さんと一緒に来たり。

○平川大作 宝塚は、東京にも自分たちの大劇場を持っていますし、組がありますから、地方公演でどんどん回ったりしていますね。

わたしは愛知県の出身なので印象に残っていますが、地方でも宝塚が年に一回くると大騒ぎです。チケットだって売れ行きがいい。なにせ、普段見られないものだから。

そういうファンからすれば、宝塚という大劇場があるこの近辺はまさに聖地ですね。宝塚歌劇のファンは「ツカファン」と言われていますが、聖地に一番近いところでスターの入り待ちをしている方たちは、それこそ信者と呼ばれるにふさわしい。ところで渡邊さんは、ファッションにも関心を持つてると思いますが、お客さんたちはどうでしたか？

○渡邊彩 結構フリフリのお洋服を着ている女性が多くて、多分、憧れるんでしょうね、ドレスシーなお洋服に。

○平川大作 宝塚を観に行くときは、そういうつもりでおしゃれをするという観客が、非常にたくさんいて、それが要するに聖地に行くためのマナーであり、心得なわけですね。ファンにしてみれば、普段着で行くわけにはいかなないわけです。

しかも、高額なチケットを確保して、いざ出かけるわけですから、気持ちの中でも芝居を観に行くという期待感を一杯にして出かけるわけですね。

宝塚は、経営母体が阪急電鉄です。創始者の小林一三氏は経済と文化の両面において大変な功績を残された人ですが、実業家としての仕事以外にもこうした文化的な遺産を残したわけです。もともとは宝塚に温泉があつて、その温泉客たちに少し出し物を見せようとしたのだと言われています。そのときに若い女の子たちが歌つて舞つたのが宝塚歌劇の発祥ですね。今でこそ女性の観客が多く、まさに女の園という感じですが、小林一三氏はもともと、歌劇を国民の演劇、国民劇として根づかせたいという考えが非常に強かつたという記録や発言が残っています。女性のためだけではなくて、家族みんなが楽しめる国民のための演劇ですね。結果的には、そのビジョンどおりにはならなかつたかもしれませんが、それでも大変な影響力がある演劇の聖地を作り上げました。世界的に見ても、こういう女性ばかりで演じる歌劇というものは珍しいことです。

瀬口さん、いかがでしょうか、宝塚について。

○瀬口昌生 宝塚の学校がありますよね。もう百期生になつたんですかね。そのぐらい歴史があります。

私と同世代なんですけど、宝塚の八十期生の方がいらつしやいまして、その人と一緒に芝居に出たんですよ。その方がお芝居の稽古中に、カラオケに行こうかと言うわけです。これは楽しみだと、どんな歌を歌うんだろうと思つて行つてみましたら、全部ミュージカルでした。選ぶ曲全部ミュージカルで、やはり好きなんだなつていう、そういう思い出はありますね。

そして、やはり清楚でしたね。身につくというか、情操的なものというのはかなり高い質なんだろうなと思いまし

た。

○平川大作 今ご紹介いただいた宝塚の音楽学校は、さまざまな訓練を通して、俳優、舞台人としての専門的な素養を身につけることができる場所です。その総合性は、日本国内でもめずらしいもので、演劇教育という面からみても、宝塚は大きい影響を与えています。そのため、宝塚を退団した後は、大女優としてテレビや舞台等で活躍している方がたくさんいます。単に有名人だから、宝塚でスターだったから、というわけではありません。要するに俳優としての基礎力が高いので、その後の仕事価値あるものになるのです。それぐらい鍛えられているということですね。

○瀬口昌生 座席は、ファンクラブの指定席があるんですね。ですので、前のスターの人は、その席を万遍なく見渡して歩いていくと、お客さんは「私を見てくれた。今、目が合った。」っていう、そういう喜びがあるようですね。

○平川大作 ここまでは、基本的には企業による経営を背景にした、大きな劇場をご紹介しました。宝塚大劇場もまた、自分たちの作った演目しか上演しません。宝塚の歌劇を観にくくためにその劇場がある。この関係が完全に一致しています。貸し館という形ではかの劇団がつかっても、そこは聖地として機能しないかもしれません。

大劇場のそばには、バウホールという小さなホールがありますが、こちらは貸し館対応もあり、他の劇団が公演をすることがあります。

さて、以降では別の種類の演劇の聖地を除いてみましょう。どちらかというと、演劇を始めて間もない、若い世代に對して場所を提供している施設、そのなかでも公的なお金の入っていない劇場の例です。個人や団体による管理です。

から、企業経営と同様のものとして考えてもいいのですが、そこで動いているお金は、今紹介が済んだ大劇場とは比べものにならないほど、ささやかなものです。それでも、やはり演劇の拠点、聖地として見逃すことはできません。それでは松本君、紹介をよろしく。

○松本慎祐 大手前大学のメディア芸術学部三回生の松本慎祐です。よろしくお願いします。僕が行ってきたのは、「ウイングフィールド」という劇場です。

ウイングフィールドは、大阪府の東心斎橋にあります。周防町ウイングス六階というビルの中に劇場があります。御堂筋線から十分ぐらいで到着します。ウイングフィールドというビルの中に、エレベーターがあり、その近くに案内係の人がいて、五階でチケットを買ってくださいと言われました。そういうシステムでした。

客席は棧敷席と呼ばれる形式で、劇場の舞台に対して少し高めに設けられています。席自体は背もたれがなく、つながった椅子です。舞台は自由に組みかえることができて、例えば、真ん中に役者が立って、お客さんは四方、いろいろなところから見られるということができたり、自由度の高い舞台です。

スタッフは、公演の準備段階から、芝居づくりにかかわる様々なサポートをしてくれるので、旗揚げ公演とか、経験の少ない劇団でも大丈夫です。劇場内では、打ち上げとか観客との交流会などをしていいことになっています。地方から来た劇団の人は、劇場内で宿泊することも一応許されています。

若手劇団応援シリーズとか、「のりうち企画」と呼ばれる実験的な公演、新人の公演、試演会など、ウイングフィールドがサポートをする様々な企画があります。公演の内容自体、実験的なものが多く、ウイングフィールドはウイングならでの公演を求めているというキャッチコピーがあります。

僕は、十月十三日に『サンタどん』を観劇しました。役者の年齢は、二十代から三十代です。お客さんの年齢層は、僕と同年代の方から四十、五十代の方もいて、二十人程でした。客席は百人は入りますが、僕が行ったときの客席の組み方では、三十から四十人程しか入れないような程度でした。

役者は五人ですが、一人が何役もこなすという形で、役者さん自らが舞台上で音響や照明もするという、そういう実験的な公演をしていました。

舞台終了後には、紙吹雪を撒くんですが、それを片づけるために、お客さんの中で一緒に片付けてくれる人を募集していました。また、台本の販売や、「まちめぐりワゴン一台全国どさ回り」をしたときのDVDの販売などをしていました。

こちらがチラシです。十一月、十二月の公演予定としては、万博設計さんと project IKKIさん、工藤俊作プロデューズプロジェクト KUTTOIの舞台をやるそうです。

こちらがウイングフィールドと、僕が観た『サンタどん』のホームページです。これで発表を終わります。

(拍手)

○平川大作 チケット代は大体幾らくらいですか。

○松本慎祐 前売りで千五百円でした。当日発売が千八百円です。

○平川大作 そこで公演しているのは全部それくらいですか。

○松本慎祐 全部ではないんですけど。

○平川大作 いろいろな値段、幅があるということですか。

○松本慎祐 大体そうですね。二千元、高くても三千元ということですか。

○平川大作 先ほどの宝塚と比べると桁が違いますね。

○瀬口昌生 今、チケット代の話になりましたので、少し補足しますと、我々が小劇場を立ち上げてまず「ここに立つ」と思う劇場の名前を挙げるとするならば、まずウイングフィールドですね。ここが一番手頃で打ちやすいんです。舞台の広さなんて、この黒板ないくらいです。

○松本慎祐 そうですね。

○瀬口昌生 興行きもこの机からそこぐらいまでのものなので、つまり、セットを立て込んでも大した量じゃなくて済むというのと、何かやっている感が出ますね。

○松本慎祐 僕が見たのは、役者さんが音響も照明も全部担当するという、いろいろ面倒な感じでした。照明の機材も舞台上に置いていたんで、かなりごちゃごちゃしているというか。

○瀬口昌生 スタッフも手を入れていくと人件費がかかりますね。お芝居が一番高いのは人件費なんですよ。

我々が一本打とうとするときに、手元にあるのが三十万円ではできません。やはり六十万円程はないときついです。大体、芝居一本にどんなに費用をかけないでやろうとしても、こういうところを使おうと思ったら劇場費とかありますから、八十万円程は最低必要です。

例えば、客席に百人入ります。三公演やります。合計三百人。チケット一枚二千円です。といつても、幾らですかね。

○松本慎祐 六十万円。

○瀬口昌生 そんなものですね。最初の旗揚げ公演というのは名前もありませんから、そんなに入らなかつたりします。なので大体うん十万円という赤字を抱えます。それでもお芝居をやるんですね。そういう人種だと僕は思っております。

○平川大作 今、館の説明の中に、「のりうち公演企画」というのが出ていましたけど、「のりうち」というのは専門用語です。意味は分かりますか。

○松本慎祐 大体しか分かりません。実験的公演という意味でしょうか。

○瀬口昌生 その日に仕込んで、その日に公演して、その日にはらして、一日で済ませる興業というのを「のりうち」と言います。

○平川大作 そうすると、劇場を借りるのは、その日の料金だけで済むわけですね。普通はそんなことはありません。一週間後にこの学校の卒業公演を、A・I・H・A・L・Sで予定していますが、準備は二日間です。公演そのものは土曜日、日曜日ですが、劇場に入るのは木曜日。借りて入ってしまえば劇場は費用がかかりますからね。「のりうち」っていうのは、それぐらいの低価格で可能な範囲で公演を実現するということですね。

それから、最近の話題として、一つつけ加えると、「新劇場法」という新しい法律ができたことがあげられます。劇場として公に認められるためには、もし火事があったときにちゃんと非常口があるとか、さまざまな建築的な条件が全部整っていないといけない。それが劇場法のルールなんです。このウイングフィールドに関しては、そういう法律に照らし合わせると、劇場の指定を受けることができないんです。

地元の管轄は消防署ですが、もし消防署から「こんなことをやったら困りますね」と問題視されたら、一瞬でつぶれます。今、なぜ劇場として使えているかというと、「まあまあそこは」と大目に見て、見逃してもらっているからです。そういう意味では、法的にはかなり不安定な存在にとどまっています。

○瀬口昌生 ちなみにウイングフィールドの名前の由来というのがありまして、もともと劇場の管理支配人の方が演劇好きなんです。アメリカのテネシー・ウイリアムズという作家の「ガラスの動物園」という作品がありまして、これがウイングフィールド家を取り巻く一幕なんです。そこからウイングフィールドと名づけられたそうです。

○平川大作 それでは、同じようなタイプの小さな小劇場として、最近拠点となっている劇場をご紹介します。

○土井七恵 大手前大学メディア芸術学部の土井です。よろしく願います。

私はインディペンデントシアターListに行きました。インディペンデントシアターとは日本橋にあり、主に演劇や映画上映をするところです。

私が観劇した作品は、『LOOP〜ループ〜』です。料金は当日券で三千円、前売券が二千五百円でした。

あらすじは、ある男性が四十七歳の誕生日の夜、記憶や体験はそのまま、三十五年前、バブル時代の十二歳に戻ってしまいます。そのバブル時代に戻ってしまった十二歳のときに人生をやり直すか、そのままいくかというストーリーでとても面白かったです。

年齢層は、二十代後半から五十代ぐらいの方々と、若干、女性の方が多かったような気がします。椅子がパイプ席で八十席ぐらいの小さい劇場だったんですけど、満席で人気のあるところでした。

アクセスは、地下鉄の恵美須町駅から行きました。私の地元が鶴橋で、近かったので日本橋で乗りかえて、堺筋線で恵美須町駅へ行きました。

バブル時代などはあまりわからなかったですが、凄く面白かったり、感動した場面もあり、とてもいい作品でした。また、機会があれば他の作品も見たいと思いました。

以上で終わります。ありがとうございました。

(拍手)

○平川大作　土井さんは、昨日芝居を見たばかりということ、皆さんの前で発表するにあたっては、いろいろリハーサルや練習が必要なんですけど、昨日のことなので、練習できませんでした。少しお話ししましょうか。お客さんは何人ぐらいましたか。

○土井七恵　八十席があつて、満席だったので八十人ぐらいでした。

○平川大作　トイレはどこにあるのか、わかりましたか。

○土井七恵　トイレは、多分なかつたんじゃあないかな。

○平川大作　そんなことはないよ。トイレは前のほうにあるんですね。

○瀬口昌生　そうです。トイレは舞台のこんなところですね。目立つんですよ。

○平川大作　トイレというのはかなり大きな問題で、先ほどの宝塚で言うと、圧倒的に女性用の数は広く多くないと駄目ですね。そうでないと、男子トイレに「ごめんね、ごめんね」って女性が入ってきて大混乱になります。今、大きい劇場を建てるなら、絶対に女性トイレは男性用の倍くらい必要です。だけど、こういう小さい規模のところであれば、とりあえずトイレはありますよというような程度。これは東京でも同じですね。東京駅前の下北沢の劇場でもそうでした。狭いところをかき分けてみたいな感じで。

○瀬口昌生　中に入つてどうでした。

○土井七恵　一階のカウンターが受付で、こちらへどうぞという感じですよ。

○瀬口昌生 もう、すぐ客席ですよ。ああいう雰囲気はどうでしたか。大劇場じゃないから、きゅつとしたところ。座って見るじゃないですか。あなたはどの辺で見たのかな。

○土井七恵 前から四列目ぐらいの真ん中辺です。

○瀬口昌生 ああ、いいところで見たね。そういう雰囲気は好きですか。

○土井七恵 好きですね。

○瀬口昌生 つまり、見る側もそうなんです。私の知り合いで、唐十郎さんの劇団に入っている人がいますが、そこはテントを立てるんです。コンセプトがそういうことですから、そこに入るだけで独特の雰囲気を味わえる。それが好きだから行くという人も多いと思いますね。

○平川大作 そうですね、お客さんの数、それから、その劇場の持つている床面積、空間の広さというものと、そこで行われる演劇の中身というのは全く無関係ではありません。

彼女が行ってきたインディペンデントListにおいては、二月中頃に私が翻訳した芝居『モジヨ ミキボー』を上演する予定があるんです。

小さいところだから、名もない俳優がやるのかなと思われるかもしれませんが、その作品の演出を手がけているのは鶴山仁さんという方で、東京の国立劇場で芸術監督をしていたくらい、日本を代表する演出家です。日本の演出家で鶴山さんの仕事に憧れない人はいないくらいの大忙し、なおかつ力のある演出家です。そんな人が、小劇場、数十

席規模の劇場で公演をするんです。例えばお金を持ってきて大きいところでやろうとなれば、そういう劇場を借りてやればいいんですけども、小さいところでやるからいい、そういう演目なんですね。

宝塚大劇場みたいに大きい劇場だと、マイクを使わなければ劇場に声が広がりませんが、小劇場なら、そんなことはありません。非常に身近な空間で、人間と人間の関係の中でお話が描かれていきます。そうした表現の方法が小劇場の魅力なんですね。

こうした小劇場から、次の時代を担うような、いわゆる有名俳優、実力俳優、スターが出ないことはありません。才能が花開くためには、必ず必要な土壌と言ってもいい。だから、小劇場が経済的に立ち行かなくなり、なくなってしまうと、それはそれで演劇の業界自体がやせ細ってしまうし、大きな意味で日本の演劇界や映画界が成り立たなくなってしまう。小劇場と、いわゆる商業的な演劇は、単に対立しているのではなく、そのように持ちつ持たれつの関係にあると私は考えています。とはいえ、小劇場の維持はたいへんです。細々と、お金のやりくりに関しては大変苦労しているという話をよく聞きます。

一方、次に紹介する二つのケースに関しては、公的なお金、要するに税金をベースにして運営されていて、公立劇場、あるいはパブリックの劇場と言われます。全国各地に存在する公立劇場は、県や市が所有していたり、大きいものでは国が管理していたりしますが、今回は市単位の劇場を二つ紹介してもらおうと思います。

○福居志穂　こんにちは。平川先生のゼミ生のメディア・芸術学部三回生の福居志穂です。よろしくお願ひします。

私は、大阪市立芸術創造館のお話をします。こちらは、愛称として「芸創(げいそう)」と言われております。

大阪市立芸術創造館は、大阪市の旭区にある旭区民センターと旭区図書館と同じ建物の中にある複合施設内の一つです。創設は、一九九四年より中島陸郎が個人で大阪市内に働きかけて、二〇〇〇年にオープンしました。この中島陸郎という方は、オレンジルームという小劇場のプロデューサーをしておられた方です。

オレンジルームは、梅田にあります今のHEP FIVEの前身である阪急ファイブの八階にあった小劇場で、そのころまだ無名だった「劇団そとばこまち」や「劇団新感線」が公演会場として利用していたり、お笑いコンビのダウンタウンも新人のころお笑いライブをしていたという有名な小劇場です。その小劇場のプロデューサーをしていた方が、個人で大阪市内に働きかけてつくられたのがこの劇場です。

この劇場は、発表する場だけではなく、練習室とホールを兼ね備えたインキュベーションセンターとされています。インキュベーションセンターとは、設立して間がない新規事業に国や地方自治体などが経営技術、金銭、人材を提供し、育成することです。

このほかに、芸術表現を目的とした活動を支援する施設として、自主企画のゼミやワークショップなども開催されています。主にクリエイターの方を講師に招いて講座を行ったり、実際に体験できる催しを行っています。

例えば、来週二十三日には「カリスマヴォイストレーナー安藤未緒が直接指導する、数々の有名アーティストが受け

た驚きのヴォイスレススン体験」という催しがあり、ヴォイスレススンの体験を一日、二千円で受けられることができます。あるいは、すでに終わってしまいましたが、日本演出家協会理事長による「関西小劇場の五十年史」というような講座が開かれたり、また、「Women In Tap」スペシャルワークショップ「from 東京」といった、東京から女性のタップダンサーを招いて、二千五百円でタップダンスを教えてもらえるというワークショップも開催されています。

ほかの企画で私が面白いなと思ったのは、「観劇主婦モニター」というものです。公演を無料で観劇できるシステムなのですが、その対象は旭区在住の主婦限定です。無料で観劇して、その感想を芸術創造館のホームページ上で掲載するというシステムです。私も演劇を観にいったときに、他の人はこの芝居を見てどんなふう感じたのかと、よく思うので、こうしてホームページなどで他の方の意見に触れられるというのも面白いなと思いました。

私が実際に観劇してきたのは、十月十四日、ちょうど一カ月前で、「賣笑ロックセンター」という劇団の旗揚げ公演『オブリ』という演目でした。こちらがそのチラシで、少し衝撃的な絵です。

この公演で、演出を手がけているジョニー大塚という方は「劇団、本谷有希子」の演出助手をされていたり、また大人計画の松尾スズキのアシスタントをしています。内容は、一言では説明できないようなもので、実際に見終わったときには、「正直」一体どうい話だったんだろう」と感じたのですが、それでも最後まで飽きることなく惹きつけられるような展開で、演出が面白いなと思ったところがたくさんありました。

たとえば照明が一切なく、ローソク二本だけを使ったシーンであったり、舞台上でガソリンに見立てて水をまくシー

ン、ほかにはミュージカルのように歌やダンスなどもあり、小劇場でもこのようなことができるのかと勉強になりました。

劇場は、私が見に行ったときはこの写真よりも少し席が増えていて、前のあいているスペースに舞台などを設置して行われていました。三つの施設が一つになっている建物なので、迷ってしまうかなと思ったんですけど、係の人がスムーズに誘導してくださって、すぐに受付までたどり着きました。

客層は、旗揚げ公演ということもあり、知り合いが多く来てたようで、十代から五十代という幅広い年齢層でした。男女比も半々といった具合で、多様な客席でした。小さなことなんですが、座席全てに座布団が用意されてあったことが嬉しく、凄く快適に観劇することができました。

十一月の昨日、今日、明日で劇団演劇畑ハッピーナッツさんの第十五周年公演『南風、はるかから』という公演が前売り二千円、当日二千二百円で行われています。

また、来週、十一月二十三日、二十四日、二十五日は、劇団ほどよしによる第七回公演『STARDUST MORRY』、内容は宮沢賢治『銀河鉄道の夜』を読むような物語ということで、前売り二千円、当日二千五百円で行っています。

また、音楽ライブなどしており、「ワンコインスタジオライブ」というタイトルで、五百円でピアノやサクソ、クラリネットなどの音楽ライブを見ることもできます。

最後にアクセスを説明します。最寄り駅は大阪市営地下鉄谷町線千林大宮駅で、徒歩十分、京阪本線森小路駅からは徒歩十分です。また、大阪駅前から市バスも出ておりますので、旭区役所前で降りていただければすぐの場所にあります。そのほか、地下駐車場もありますので、車での来場も可能です。

いろいろなイベントやワークショップ、音楽やダンス、演劇なども行っており、値段もワンコインから二千円台ぐらいまでとリーズナブルです。どのような公演があるのか、一度インターネットで大阪市立芸術創造館と検索して、興味があれば一度足を運んでみてください。新しいものに出会えるきっかけになるかもしれません。

以上で終わります。ありがとうございます。

(拍手)

○平川大作 芸創というと、瀬口さんは何度も使われていますね。

○瀬口昌生 そうですね。そこは向かいのイスタンブールという店のトルコライスがお勧めですね。

あと、ここは劇場という名前じゃなくて大練習室という名前になっていますね。

使う側のメリットは、夜十時半ぐらいまで稽古ができるんです。演劇って大体、夜に稽古をしますから、十時半というのは有難いですね。デメリットは少し駅から遠いという、そんなところですね。

○平川大作 大阪市のものですので、今、話題の橋下市長の直接管轄下にあるわけです。ぶつつぶしみたいな話にはなっていないでしょうけども、なかなか厳しい環境に置かれているだろうなと思いますね。

福居さんが見にいったのは、貸し館の公演ですの、いわゆる自主企画、自主公演ではない形ですね。自主企画、自主公演という場合は、その劇場の予算を使つてつくるものですから、どうしても税金の有効利用を意識しないといけない。今、こうしたことを舞台にすることが多くの観客の人のためになるとか、意味があるとか、そうした理由づけが必要なんです。

多くのパブリックの劇場というのは芸術監督制というものを敷いています。どうしても芸術のことですからお金勘定だけで成功、不成功を判断できない。芸術監督という人間がいて、その人が企画をして、これをいま芸術として発信したいという、いわばポリシーを決めていく。「芸術」がそうした判断の材料としているのが、何システムでしたか。

○福居志穂 観劇主婦モニター。

○平川大作 要するに税金でやっていますから、観劇主婦モニターという形で、批判を受け入れて、成功・不成功を共有していきましょうということですね。お客さんを中心にして、そうした意見を吸い上げるといったことの仕組みを積極的に作り上げているようで、いいことだなと思いますね。

ただ、「芸術」で惜しいのは交通の便ですね。駅から少し遠いですね。

○瀬口昌生 そうですね。

○平川大作 仕方がないのかな。あと、市の施設だからなんでしようね、近くに消防署がありますよね。

○瀬口昌生 ありますね。

○平川大作　それでは、もう一つ、伊丹のA・I・H・A・L・Lについてお願いします。

○角高麻子　メディア・芸術学部三回生の角高です。よろしくお願いします。

私は、兵庫県伊丹市にある伊丹市立演劇ホール、通称A・I・H・A・L・Lに行きました。

行き方はいろいろあるんですけど、私は阪急の伊丹駅から徒歩で行きました。ずっと真っすぐ進んでいけば十五分程度で着きます。歩いている途中に商店街など食べるところがたくさんあるので、観劇前や後に立ち寄ってもらってもいいと思います。

A・I・H・A・L・Lは昭和六十三年十一月二十三日に開館され、ちょうど来週の十一月二十三日で二十四年目となります。そして、平成十七年に地域芸術環境づくりに特に功績のあった公立文化施設に与えられる第一回JAFRAアワード(総務大臣賞)を授賞しました。

近年では、親子で参加できるものやプロを目指す方との舞台芸術をより展開させていくアウトリーチ事業(教育普及事業)にも取り組んでいます。

A・I・H・A・L・Lでは、地域とのかかわりを大切に持っているようです。

劇場内なんですけど、規模としては約三百五十平方メートル、客席でいうと、多分きつきつに詰めて通常の構成、約三百席ほどになっております。

A.I.H.A.L.L.の舞台は、よく見られる体育館のようなプロセニウム型ではなくて、ホールの床が可動式という特徴を持つ舞台構造のフラットスペース型の劇場になっています。このため、自由に舞台や客席を設定することが可能なため、作品によって独自の演出をすることができます。

劇場以外のことなんですけど、大きな劇場ではありませんのでパンフレットなどの販売物は置いていませんでした。そのかわり、座席にアンケートとともに、たくさんの方の折り込みチラシがありました。

ホームページを見るのもいいですが、このような折り込みチラシから情報を得るのも一つの方法だと思います。たくさん入っているのでも、そこから自分の見たい作品を探すのもいいと思います。

また来週、二十四日、二十五日に平川先生の四回生のゼミ生たちが上演する『銭湯物語』があります。皆様にも配られていると思いますので、見てください。

十月二十一日に、エイチエムピー・シアターカンパニーによる『アテンプツ・オン・ハー・ライフ』というイギリス劇作家のマーティン・クリンプの作品を見に行きました。翻訳は平川先生が担当しています。

あらすじは、俳優さんたちがアンという女性について語る話なんですけど、劇中では一切、アンはあらわれず、俳優さんたちの頭の中だけで想像されて描かれています。

また、物語は区切られているんですけど、それは連続的なものではなく、また、関連性も一切ないんですけど、私は少し難しい話でした。観劇後には、演出家の方々が出てきて、作品の解説をするアフタートークなども行っていました。

た。

客層は、若い方からお年寄りの方までたくさんいました。私が見た感じ、若干女性の方が多かなという印象はありました。

A.I.H.A.L.L.は、フラットスペース型の劇場なので、自由に設定することができて、独自の舞台の見せ方を演出することができません。よって、作品ごとに別の劇場で見ているような新鮮な感じがします。また、舞台と近い目線で見られるので、私たち観客はより自然と物語の中に引き込まれていきます。そういう点がA.I.H.A.L.L.の劇場の魅力とも言えますが、パイプ椅子で長時間見るのが少し疲れるという点もあります。

こうして自分の足で劇場に行き、自分の目で見て感じるのが、劇場を知るときつかけになると思います。なので、私たちの話を聞いて少しでも興味を持っていただければ幸いです。ぜひ、いろんな場所に行つていろんな劇を見てくださ

い。

以上で終わります。ありがとうございました。

(拍手)

○平川大作 今、画面に映しましたのが、お手元のチラシの卒業公演『銭湯物語』です。A.I.H.A.L.L.というのはフラットスペースと説明がありました。これが舞台の図面です。彼女の発表に出てきた「プロセシウム」というのは、舞台と観客の間に額縁のようにある劇場ならではの構造物のことをさします。別の呼び方で額縁舞台というのがあります

が、A・I・H・A・L・Lには、それがありません。客席と舞台を自由に組みかえることができる空間です。A・I・H・A・L・Lは、どんな劇場でしょうか？

○瀬口昌生 JRだと駅から歩いて一分ですから、非常にわかりやすいですね。阪急だと一〇分くらいなんですけども、JRだったら、駅を出て左側見たらA・I・H・A・L・Lというのがありますので、これは便利ですね。

劇場自体はそのように可動式ということもあり、先ほど平川先生もおっしゃいました、この額縁がないので非常に閑散としたようなことに見えがちなのはデメリットかもしれませんが、逆にそれをメリットとしていろんな空間の使い方ができますから、芸術的なことを考えるには、ここはいいかもしれないですね。

○平川大作 さっきの芸創に比べると、空間のしつらえはどうでしょうか。

○瀬口昌生 芸術創造館も似たような形ですよ。

あと、我々の感覚では自分たちで自主劇場をつくって、いきなりA・I・H・A・L・Lの公演というのは少しハードルが高いという印象がありますね。もう少し小さいところでやってみたらどうか、そういう印象があります。

○平川大作 高校演劇の発表会でも使われていて、それはやはり市が経営しているということもありますね。

○瀬口昌生 あと、ここは伊丹市民が入ると安いんですよ。

○平川大作 使うときにはそうですね。

○角高麻子 伊丹市民の人だったら、多分、貸出料とか。

○平川大作 そうそう、貸し出しにおいては、そういうメリットはありますね。

お手元の資料には、名前だけ挙げるにとどまりましたが、こうしたパブリックの劇場は、大きいところでは国立の文楽劇場があります。こどもやはり橋下市長とのやりとりで、お金を出す、出さないでいろいろと話題になったところですね。

それから、兵庫県立西宮芸術文化センター。ここからは一番近いパブリックシアターとして阪急西宮北口駅前にあります。中ホールが演劇用ホールで二階まで入れると八百席と相当大規模です。A.I.H.A.L.I.や芸創、あるいは小さいところというとな数十席しかないウイングフィールドと比べれば、中ホールとはいえ、堂々たる大劇場ですね。貸し館として、東京で制作された演目の上演が多い劇場です。

昔、兵庫県には、ひょうご舞台芸術シリーズという上演企画があつて、新しい演目を制作しては全国に向けて発信していたんですが、最近はオーケストラを持つようになって、そちらのほうが演劇よりも予算的に潤沢なのが現状です。

それから、これも言及のみですが、愛称ピッコロシアターも経営は兵庫県です。正確には兵庫県立尼崎青少年創造劇場ですね。

○瀬口昌生 はい。

○平川大作 こちらには、瀬口先生が所属していた劇団があります。ご紹介いただけますか。

○瀬口昌生 母体は公益財団法人兵庫県芸術文化協会というところとして、施設としては全部で六つほどやっていきますね。県民会館、原田の森ギャラリー、横尾忠則現代美術館、ピッコロシアター、芸術文化センター、兵庫アーテイストサロンというような感じでやっています。全く余談ですけど、大手前大学夙川キャンパスの道を挟んだ向かいのコンクリートの建物、アートセンターなんですけど、そこも横尾忠則でしたね。

○平川大作 展覧会をいたしました。

○瀬口昌生 実は兵庫県は芸術県なんです。芸術にお金を出すという、僕らにとっては有難い県です。

○平川大作 特にピッコロシアターに関しては常設の劇団がある。劇団員は給料をもらいながら、自主公演を企画してつくっていくという、これは全国的にも珍しい例ですね。唯一とは言えないのですが、創設当時はとにかく日本初でした。

○瀬口昌生 そうですね。県立というレベルでは初めてでした。お芝居をして御飯が食べられるという、我々にとってはどうってつけの場所です。年棒は、公表されているので言っても差し支えはないんですが、百八十万円です。ひとり身でやっていく分にはいいですね。

○平川大作 ピッコロシアターには大ホール、中ホール、それから小ホールがありましたね。二年前の演目で、大手前大学の卒業生が中ホールを使って公演を行いました。かなり多目的に使える小劇場スペースでした。ピッコロシアターの大ホールというのは、もう十年ぐらい前になりますが、ある雑誌で、全国のあらゆる劇場の中でベストテンを選んだと

きに、当時一位に輝いていました。使う側の立場からすると、使い勝手がいい、あるいは観客との距離感などがちょうどおさまりがいいという評価でした。そのあたりは瀬口さん、いかがでしょう。

○瀬口昌生 はい、一番使いやすい劇場だということで、何か新聞紙面に公表されていましたね。

大ホールでも四百席ですから、非常に近いですね。空間としては使いやすいですし、我々役者や音楽をやっている人は音の響きを気にするんですけども、ピッコロシアターは舞台の後ろからぼつとしゃべっても客席の後ろまで届くという、そういう施設として注目されたというのではありません。

○平川大作 以上がピッコロシアターです。続けてもうひとつ、資料にあげておいたのは「KAVC」と書いて、通称カブックというパブリックの劇場です。神戸アートビレッジセンターが正式名称で、頭文字をとるとKAVCになります。神戸市が新開地に持つている多目的芸術ホールで、演劇もあれば映画もやる、いわゆるアートギャラリーとして展示もするという形で、公演回数としてはそれほど頻繁ではありませんが、地域を代表するパブリックのシアターです。

この阪神間は観光圏であり、古くから文化の発信地でした。ジャズにしろ、海外の文化にしろ、新しいものをどんどん受け入れる土地柄です。そうした結果、今日学生諸君の報告によつてご紹介したように、多種多様な演劇文化が花開いているといえるでしょう。

学生諸君の報告にもありましたように、劇場というものは、とにかく行ってみないとわからない。どんな小さなことでも観客はいろいろと観察しながら、全身でその建物、そこに漂う空気を受け止めます。それが劇場という、ある種の

「おもてなしの場」です。

聖地という言葉を振りかえつて、今日の話締めくくりたいと思います。今日お話をしてきたのはメインディッシュとして、「一、蓄積の上の聖地」というテーマでした。あの杉村春子が立った舞台と同じ舞台で芝居をしたというのが俳優にとつての「聖地」、ですよ、瀬口さん。やはり、そこには大きな意味がありますよね。

○瀬口昌生　そうですね。

○平川大作　あの劇団がやった、あの大名優が立った。その積み重ねが空間を特別なものに転じていきます。場所として、聖地と言つていいような場所のオーラを帯びる。劇場とはそういう場所のこともあります。

一方、そうは言いながらも、演劇においては「行為が作り上げる聖地」という側面もあります。手短にお話ししましょう。資料には「今ここで生まれる演劇の場」と書きましたが、要は、誰かが演技をはじめれば、とたんにそこが演劇の場所、いわば「他とは違う場所」になつてしまふという考え方です。

○瀬口昌生　お芝居をつくる三大要素というのがありまして、役者、お客さん、場所、この三つがあれば演劇はどこでもできるということですね。ここにおいては、場所に特化したお話になっておりますが。

○平川大作　そういうことです。見られる人と見る人がいて、さあ、ここで演劇をやるうといった瞬間、演劇の考え方でいうと、その空間は聖地となります。特別な場所に「なる」ということです。

こんな例をご紹介します。サミュエル・ベケットという劇作家が書いた『ゴドーを待ちながら』という作品が

あります。不条理演劇で難しい内容とも言われますが、それでも大変有名な芝居です。つい数カ月前も新国立劇場で上演がありました。

その『ゴドーを待ちながら』は、ある厳しい状況で上演すると、非常に内容的に高まるということが報告されています。

たとえば刑務所の慰問です。サン・クエンティン刑務所という有名な監獄で起きた出来事です。ずっと牢屋に入られて、絶望的な状況しかない囚人の前で、『ゴドー』を上演したという逸話があります。物語はあつてなきがごとしで、登場人物ふたりがゴドーを待っているが、結局ゴドーは来なかつたね、という前衛的な芝居なんです。インテリが好むような内容にもかかわらず、囚人たちはそれを見て深く感動したと言われています。ある空間を特殊な状況がとりまいていた場合、そこで行われる演劇が芸術上の聖地を作りだすんですね。

同じく、『ゴドー』は戦時下のような過酷な環境で上演すると、やはり意義深い芝居になるという報告があります。かつて、サラエボで人々が日常的に戦争の犠牲になっていくなか、そこでの上演も質の高いものができたといえます。

建物があるということも聖地の証なんです。演技するということ行為がそれを取り巻く環境と重なったとき、なにもない場所が聖地になる。それが演劇の力です。

例えばピッコロ劇団は、震災の折にそういう活動をしましたよね。

○瀬口昌生 はい。震災の折は、小学校のグラウンドがメインなんですけども、各地を回りましたね。

○平川大作 何もない運動場みたいところが、参加する子供たちにとつては特別な場所、聖地になっていく。演劇にはそういう力があることを指摘しておきたいと思います。

三つ目のテーマは次回、考えることにしましょう。十二月十五日の一時三十分、CELLフォーラムという教室ではない場所で、今日のお話の続きを展開したいと思います。

まさに演劇をつくる稽古場こそ芸術の聖地であるということを紹介したいと考えています。稽古場ではどんなことが起こるのか、ワークシヨップ形式でご覧いただきます。

一カ月後になりますが、また新たな角度から演劇の聖地を訪れるつもりで、そこで何かが生み出されていく現場を再現、考察してみたいと思います。

時間いっぱいになりました。ご質問などあればお伺いします。

○質問者 昔、アンゲラ劇場ってありましたよね。

○瀬口昌生 ありました。

○質問者 それはどういう分野ですか。

○瀬口昌生 そうですね、アンゲラというのは、今はもう古い言葉になりましたかね。

○平川大作 アンダーグラウンド劇場というのを省略してアングラ劇場と言っていました。アングラ劇場の考え方は、それまでの既成の劇場を否定するところから始まりました。たとえば唐十郎は公演や神社の境内にテントを張って芝居を打つ、あるいは、寺山修司という人は劇場もテントも要らないと言って、街頭演劇といって、いきなり町のと真ん中で演劇を始めてしまう。劇場を離れることで、演じるものと観客との関係を問い直したり、あるいは、都市や文化の枠組みの中で演劇の存在価値を考えたり、時代の状況をライブ感覚で演劇表現に取り込んでいくとか、そうしたことを狙ったのがアングラ演劇です。

アングラ演劇専用の劇場というのは理論上矛盾しています。劇場という場所の特権性を思想的に否定しているので、アングラはどこでもやれる。鈴木忠志という有名な演出家は、早稲田の喫茶店で演劇をはじめた。最近はそのような場所での上演が流行っているみたいですね。

○瀬口昌生 そうですね、サロンスペースといわれるところで。

○平川大作 いわゆる劇場という空間ではなく、専用の設備もなく、でも、そういうところでやろうよという試みは今もありませんが、そうした若者を中心とした試みをこの二十一世紀においてはもうアングラ演劇とは言わなくなりましたね。一九七〇年代に日本で中心的だった演劇思想は、いまでは一つの演劇のもつカラーというか、特定の雰囲気指向性を指す言葉として使われていようです。

○瀬口昌生 何か、そのほかご質問などございましたら。

○平川大作　それでは、おしまいとらうことよろしいですか。

○司会　どうもありがとうございました。